

## 教育優秀職員表彰を受賞して

小 森 由美子

薬学部 薬学科

### はじめに

平成18年度に薬学部が6年制移行し、より実践的な教育方法や長期実務実習などが教育カリキュラムに導入されたため、それらを円滑に実施するための環境整備が急務となった。この時期に教員として2つの仕事をさせて頂いたので、その経緯について報告する。

### 薬学部教育におけるPBL導入のための環境整備

薬剤師を目指す学生に「問題発見・解決能力」や「コミュニケーション能力」を学ばせる手法のひとつにPBL (Problem-based learning) がある。これは教員が提示したシナリオ (教材) に基づき、学生がグループディスカッションをしながら問題点や自分たちが学ぶべき課題等を抽出・解決していくというもので、教員はその過程にチューター (ファシリテーター) として陪席するが、通常の講義のように“教える”という行為は行なわない。薬学部においても大学院で長期臨床研修を行なう少人数の学生を対象として既に導入されていたが、6年制ではこれを学部学生の教育に取り入れることが求められ、「①200名を超える学生を対象とした運用システムと学習成果評価法の確立、②学生グループ数に対応する人数の教員 (チューター) 養成、③学生の学習レベルに合わせた学習課題の準備」などの諸問題に対応する必

要が生じた。

幸いなことに、私は自分自身の担当科目 (微生物、感染症関連) においてより深い内容の教育を行なうため、学会の認定資格であるICD (Infection control doctor) を取得する目的で、以前より各種セミナーや講習会に参加してきた。そのひとつに医師、看護師、臨床検査技師などチーム医療に不可欠な職種の人々と共にPBL的手法で感染管理を学ぶワークショップがあり、この参加経験を生かしてシステム立ち上げを試みた。また臨床系の教員には既になじみの深いPBLであったが、基礎系科目の教員にとってPBLへの参加には心理的に抵抗があると思われたため、初めてPBLを体験する先生方に対するガイダンスやチューター・ガイドの作成などを行なった。また6年制への導入の前段階として、4年制の学生を対象に2年間の試行を行うことで運用における様々な問題を洗い出すとともに、教員に経験を積んで頂き、また学生の反応を教員にフィードバックすることで教員にPBLの効果や意義を理解していただけるよう努めた。

これらの実施に向けた環境整備には、名城大学総合研究所・学術研究奨励助成制度による支援を頂くことができ、またその過程で多くの先生や事務職員の方との連携・協力体制を築くことができたことに感謝したい。

## 感染予防策の啓蒙と予防接種指導

2007～2008年にかけて問題となった10～20代の若者の間での麻疹（はしか）の流行は、学生を受け入れる医療施設側に危機感をもたらし、薬学教育のカリキュラムに導入された「1年次の早期体験学習」、「5年次の長期実務実習」においても、参加する学生に対して適切な感染予防策を教育・実施することが求められるようになった。また2008年1月には厚生労働省からも「医療系大学の学生に対する予防接種歴や感染症罹患歴の確認」について告示が出され、大学における適切な対応が急務となった。本学部では数年前より4年次に麻疹等の感染症に対する抗体検査が実施されていたが、学生の大部分はその意義を十分に理解しておらず、対費用効果が低い対応しかとられていない状態であった。そこで実務実習と1年生の導入教育担当の教員、教務委員会、保健管理センターの協力を得て、学生自身が「医療従事者として自らの健康状態に関心と責任をもつことが重要である」と自覚できるような教育の実践と、在学中の全学生の免疫状況を把握できるシステムの構築を試みた。

まずに教員や事務サイドに関心を持って頂くため、3月に国立感染症研究所から講師を招き講演会を企画した。4月以降には新入生に対してガイダンスを実施、さらに講義時間を確保しての教育を行うと共に、1～4年の全学生に対し、感染症罹患歴と予防接種歴の調査を実施した。また従来は業者任せであった抗体検査方法の見直しを行い、1、4年生およびクラブ活動で病院ボランティアを行う学生に対する抗体検査を実施して頂いた。また学生に対して結果のフィードバックを行い、個別指導が必要な場合は実施するとともに、抗体価の低い学生における予防接種の義務化にも取り組んだ。その結果、1年生約120名と4年生約50名が予防接種を受け、安心して実務実習や体験学習等に臨むことができた。この試みは次年度以降も継続的に実施していく必要があるた

め、現在も関係諸教職員とともにより良いシステムづくりと環境整備に向けて努力している。

今回の表彰の対象となった2つの仕事は、自分自身の教育力向上のために研鑽してきた事柄が、偶然にも大学や学生の役に立つ仕事に応用できた結果と考えている。今後もこの経験を生かし、どのような立場にたっても適切な対処ができるよう、知識や経験の幅を広げてゆきたい。

最後になりましたが、名城大学に奉職して25年となる節目の年に教育優秀職員表彰を受けた事について、お世話になった諸先生、事務職員の方々に深く御礼申し上げます。